

高級原木しいたけ「のとてまり」の収穫量と気温との関係について（予報）

八島 武志・小谷 二郎・八神 徳彦

I はじめに

石川県の北部に位置する奥能登地域は、原木しいたけの栽培が盛んな地域であるが、生産地の過疎化及び高齢化、価格低迷等が挙げられ、産地の衰退が危惧されている。

このような状況の下、本県では平成 22 年 10 月 26 日に「奥能登原木しいたけ活性化協議会」（以下、「協議会」とする）を設立し、生産拡大、流通販売の体制づくり、ブランド化の推進を目指してきた。そして、おおぞら農業協同組合、町野町農業協同組合、珠洲市農業協同組合の連名で「のとてまり」の商標登録を申請し、平成 23 年 9 月 9 日に登録された。

協議会では共選を実施し、傘の大きさ 8cm 以上、肉厚 3cm 以上、巻き込み 1cm 以上の物を特秀品とし、「のとてまり」のブランド名で専用の化粧箱に入れ出荷している。

平成 23 年 12 月 22 日に初出荷を行ったときには他のしいたけと比して高値がつき、以降毎年初出荷では高値で取引されている。この影響により、もともと乾しいたけ生産のみ行っていた生産者が「のとてまり」を生産するようになり、また、原木しいたけ生産への新規参入者の増加をもたらすこととなった。

本研究では、原木しいたけの子実体を大きく成長させる要因として気温に着目し、最適な温度条件を解明することを目的とする。

II 方法

石川県珠洲市東山中町、輪島市に計 3 箇所、生産者がほだ場として利用しているビニールハウスを調査地として設定した。

ビニールハウス中央と、ハウス外に温度計（ティアンドデイ社製、RTR-502）を各 1 台、計 6 台設置し、15 分間隔で気温を計測した。計測期間は平成 26 年 1 月 24 日 0 時から同年 3 月 31 日までとした。ただし、3 月 31 日までにしいたけ生産を終了した場合はその日までとした。

III 結果と考察

各調査地から得られた気温データを図-1 から図

-3 に示す。

どの調査地においてもハウス内とハウス外との 24 時間平均気温を比較すると、外気温が氷点下から 5℃の寒い条件でもハウス内は約 2.6℃高く氷点下になることはほとんど見られなかった。これはビニールハウスの保温効果のためと考えられる。

また、外気温が 10℃を超える様な暖かい条件では、ハウス内平均温度は外気温と同程度であった。ハウス内の最高気温が一時的に 15℃を超え、すぐに低下している状況が読み取れるが、これは日光が差し込むことでハウス内の気温が急激に上昇し、それに対応して生産者がハウス側面や天窓、出入口を開放した結果、ハウス内平均気温を外気温と同程度に管理したためと考えられる。

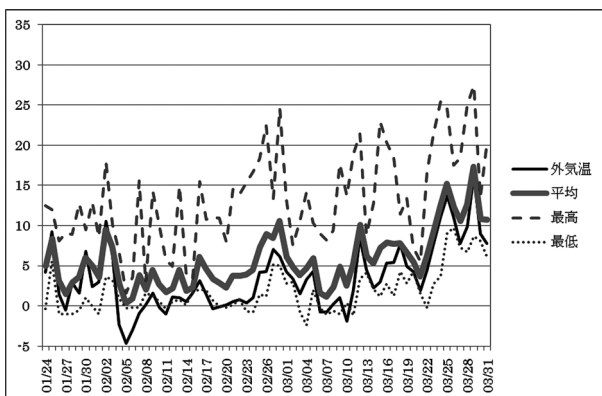
珠洲市東山中町、輪島市門前町の生産者は、平成 25 年度の「のとてまり」出荷数が 400 個を超え、50 名を超える生産者のなかでも上位であった。この 2 名はハウス内平均気温が 0℃から 10℃の範囲内であった。輪島市の生産者も同様に 0℃から 10℃の範囲で管理していたが、やや低温で推移したことが生産量に影響したのではないかと考えられる。

IV 今後の問題点

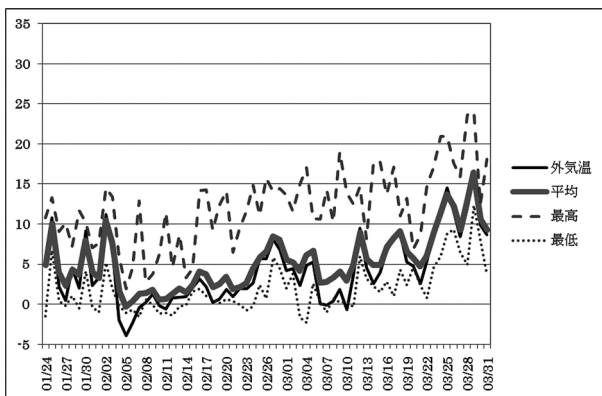
今回の調査では冬期発生期間の一部における気温のみに着目したが、今後発生初期からの気温管理や、散水等栽培管理の違いによる「のとてまり」の収穫量について調査を続けていきたい。また、原木も購入であったり、自力伐採であったりと様々で、原木の太さ、品質の影響も考えられる。

V 謝辞

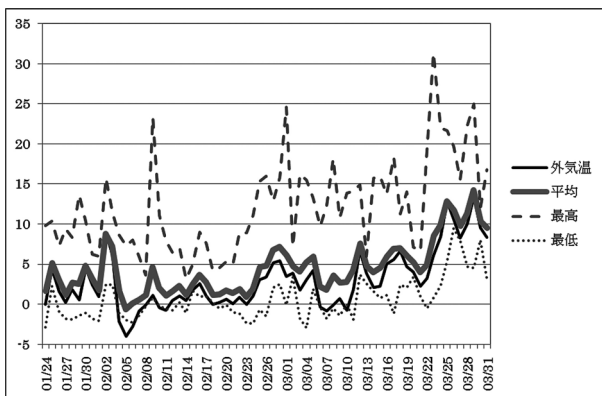
今回の調査にあたり、一般財団法人日本きのこセンターの平野伸夫氏および JA 全農いしかわの高森正治氏に助言と助力をいただいた。また調査に快く協力していただいた生産者の方々と、石川県奥能登農林総合事務所、JA おおぞら、JA 町野町、JA すずしの職員の方々にこの場を借りて謝意を表す。



図一 気温観測結果(珠洲市東山中町)
ハウス外気温とハウス内は日平均気温



図二 気温観測結果(輪島市門前町)
ハウス外気温とハウス内は日平均気温



図三 気温観測結果(輪島市)
ハウス外気温とハウス内は日平均気温